



3416

曲亭翁編述



八犬傳 第九輯 中套七 弓柳川重信画



文溪堂精刊

八犬傳第九輯中帙附言

本傳の文化十一年甲戌の春書賈平林堂の板元の為第一輯の腹稿と思ひ起せ
 まふ平林堂類齡既七旬長編の刊約做果さん心許すとそ夥計の書賈山青
 堂の譲らんと請ひよ予の意不儘とて當時稿本五巻と山青堂取らけりかくて書
 画削刷の工成りたる年の冬始めて世に見ゆととらるぬ十二年丙子の春正月第
 二輯五巻と續出未及く世評のく喝采看官亦復後輯の出ると俟と一日千秋の
 如とのめり是より一七後山青堂多慾の故他支小航とゆえり刊行等閑の年間
 あり第三輯五巻の文政二年巳卯春正月續出第四輯四巻の三年庚辰冬十月
 發販第五輯六巻の六年癸未春正月續出ふけり第一輯と刊約の年よりしてあ
 へり十ヶ年あり然る毎編出ると俟と看官渴望せざるはる當球拉玉の異るは
 時好小稱りの今昔を比とゆえり刊約の書肆が等閑る羸餘を他責の為果と
 本錢續むるのけり新舊五輯の刻板を涌泉堂の賣與へり第六輯より下續

八尺傳し道一巻二

文溪堂藏

刊の書賈替りて第六輯五卷五の巻を續て上下とす。十年丁亥春正月涌泉堂刊
行けり。第五輯發販の年より一々中絶あり五ヶ年を経て第七輯七卷の年
冬十月稿本既成るもの。涌泉堂も亦本錢續ぎの上帳四卷の書林文溪堂の資
助ありて十二年己丑の冬十月廿九日發販せし。當時予のさりとる知む下帳三卷の
十三年春正月辛くして續出せし。予も亦涌泉堂も等閑しとて理義と思は
始より一校閱と二字も作者のさしけり。備書廬人の為の謬を稿本と同かざるの
多し。況七輯發販のよと報るもさるが如し。予の例違ふと咎めて云云と折書
林永壽堂文溪堂等為の勸解るも怠状とりのある。陪語數四及びおける。予は聽ぎ
んはさるが如くゆるく已おけり。かや程涌泉堂の後輯の刊仍微力足るより
けし。第一輯より七輯まで所藏の刻板を沽却せり。大阪の書林某甲が
購得りて去れりとす。然而第八輯より以下の刊仍も文溪堂が購受て
續出さるる。本傳新舊の板家扶。江戸大阪と両家ある。第五輯より

下ありて刊仍の書肆の替り。前後都て四名入具。結局に至る。その板分れて七輯ま
で。過浪速の舊遺れて。予の毫も識りけ。彼地の書肆の藏板を思へ。一
奇とす。識者の折眉を擧めて江戸の花と失はせ。嗟嘆あるものありと然らば
遮莫為幸。第八輯より下の江戸の書肆が刊行する。文溪堂の所藏ある。作者の
面と起索似。榮辱得失物皆介る。本傳の限り。是れより有為轉變の速
ると思ふ足れり。かて第八輯の江戸の書林文溪堂が刊仍。天保三年壬辰は夏五月
二十日上帳五卷。四の巻の上下二卷。發販。下帳五卷。二の巻の上下
續出。第九輯上帳六卷。今茲乙未春二月二十日發販。中帳七卷。今番出
せり。又下帳七卷。明年丙申の春發運成るとも。秋冬の時候必上續し。大圖
圓ふる。欲まかれ。六輯以下の分卷共六十八卷二百二十八回。七巻の全部
の抑策子物語のかく長き。續る。書の外の見。天の作者の意。壽詩借
きて。筆さ。あ。廿餘年の久。飽く。堪。その結局と世の人

元來此の如くうん命の時あり。因圓將近うんとまある懼し。あるめて。稗官
 實利は稱いけんと思ふも鳥許の所為のわりのけ。
 この書第五輯をい一帙五巻と二輯とを第五輯の六巻をい四輯の足らるる補へる。
 第六輯より以下の涌泉堂等がを未儘して或の六巻と一輯と一或の七巻と一
 輯とをかくて第八輯に至るその文溪堂の需る為の十巻二帙と一輯とを第九輯の巻の
 數のうまきく多るる。二十巻と二分して上帙中帙下帙とをその第五輯までの如く
 毎輯五巻をい十三輯に至るべし然るに九輯の約りの文溪堂の好あるれ今も思
 へばよりあり八を陰數の終りへの下の十あるも十一のふかふとて。陰數の終りとせば九を
 陽數の終りへかれば八犬英士の全傳局と九輯を結ぶ。その所以るはあふまか。
 吾嘗唐山の稗史と見る水滸西遊記傳の如しは大筆の分段とて。水滸の二百
 八箇の豪傑その人極めく多ければ史進魯智深楊志武松等全傳用の豪
 傑る。小梁山泊入りより。その勢は始必俱軍陣は位むの外ありとのへもる。

如く況百人多る取者の始あり終る。俗云立滅せざるの稀へ又西遊記の三藏師徒孫
 猪沙と足四名のその人極めて寡ければ其支相似て。且重複多る水滸の亦重複あり。
 長物語の覺率と彼重複の瑕疵ある。年来多る筆と把て是等の苦海に墮落せざ
 る。所以ありけり。悟る由。最鳥許が。説話るも本傳の始より用意とて。く
 加減あり。迺水滸百人の百と除して八犬士あり又加ふ八犬女あり。且里見侯父子と、
 大と俱ふ十九人は。一部の主人公とを。かればその人より又その人寡る。水滸の
 西遊の寡るに似る。彼の餘の忠臣義士の。彼は。の者。とて。始
 終あり中途より立滅せ者一人とて。あふ。看官徐の結局を見る。作
 者の用意を知るより。あふん。
 唐山元明の才子が作る稗史あり。法則あり。所謂法則とて。一主人公一伏線
 二小襯添四照應五反對六小省筆七小隱微。即是の。主人公。此回の能樂あり。シ
 テロキの如く。その書の一部の主人公あり。又一回毎の主人公あり。主亦容ある。とあり。容

亦主あるる所のこを壁に象棋の起馬の如し。敵の馬を畏るる所の馬をとりて彼を
 攻我馬と喪へ我馬をとりて苦あり。変化安あを疆りあるん是主客の崖略又伏線と
 視深のその事相似く同トクを云伏線の後の必出を死趣向あを數回以前此墨
 打と置て置くのえ又視深の下落也。此間のふまのゆえの後の大関目の妙趣向と出さ
 んとて數回前よりその事の起本來麻を措へ金瑞が水滸傳の評注の續流の作と
 即視深とあるト共ふとと訓むべし。又照應の照對も壁に律詩の對句ある如く彼
 と此と相照しく趣向の對と取るもかまは照對の重複の似れども必是同トクを重複を
 作者諺て前の趣向の似る事と後に至て復出まとい又照對の故意の前の趣向の對
 取く彼と此と照とて壁に本傳第九十回船虫温内分の牛の角とて裁せり。第七十
 四回北越二十村の閉牛の照對又八十四回の大飼現八が十住河で較舟の組敷の第
 二十一回信乃が芳流閣上る組敷の反對は這反對の照對と相似て同トクを照對の牛と
 同トクの對をも如し。その物の同トクれどもその事同トクれども又反對の人の同トクれどもその

事同トクを信乃が組敷の閣上と閣下と較舟あり。千住河の組敷の船中ありて
 樓閣あり。且前あり現八が信乃と捕捕んと欲り。後あり信乃と道節が現八を捉へん
 と。情態光景太く異へんとて反對と。事此彼相反てあつる對較做ま
 の本傳ありの對より。枚擧るの違あは餘の做らる知死の。又省筆の事長
 也。後の重ていさうん為の必つる稱ぬ人の偷聞させ筆と省は或地の詞とて其
 あり。その人の口中より。説出まといの脩くも。作者の筆と省くが為の看官も亦倦る
 るり。又隱微の作者の文外の深意あり。百年の後知音と俟く。是と悟らるめんと水
 滸傳の隱微より。李執費金瑞等のいへり。唐山の文人才子水滸を弄ぶ者又
 れども。評しゆる詳の隱微を發明せしめる。隱微の悟りたけれども。七法則を知らず
 して。綴るのさあらん及びむるが本傳の彼法則は做ふとより。又但本傳のするを
 美少年録俠客傳の餘も都て法則あり。看官あれを知らずるも。子夏曰。小道
 とへとも見る。死者あり。嗚呼。談何を容易るん。それらのよりの知音の評し拵を答

一とるが亦看官の爲に注し。
 予々毎編の策子物語の寫本あり彫果の折巻々々校閱せざるを各刊の書
 肆として性急なる者もあれば作者のあらは儘せぬの事あり且その巻々の已が綴れる文
 ると眼が孰れても忘れぬと不幾回も讀復其誤寫ありと心つて暗記の隨に讀
 るるも動もまじら檢送と後悔し思ふの甚くも総て刊本の書画俱く人誂へ
 板下て物と調ぬれば必その板下の訛對を是と爲す是亦加ふる刷人の誤りあり半頁
 十一約あるも真名毎毎偽訓あり真名と假名と二約あり半頁二十約あり一約あり
 文字幾百と知れ然と孰る眼也最も急迫く校閱せぬれば檢送を誤脱する
 去と事過る姑園は本輯上帳六卷も筆工の誤寫ありと出版の後見出せぬと
 初らぬ左の録を二の卷 荊荷當の荊荷作す 荷の誤寫を二の卷
 正行當の正儀の作す 六の卷 九丁背 雜壯雜の皺のあまらぬと筆工のあはれ
 へ底と校閱の折檢送しあり餘てあをの錯へ輯毎あるは第一輯の殊

かの帝の本文のまゝ本輯上帳の引の孔子家語と引有文事者必有武
 備とのべを誤り文備は作より又第八輯の自序の莊子と引名者實之實
 とある者字と脱されたり是より先も自序の誤寫あり轉倒あり後至て見せし
 いふせん悔も及ぶ發販の後その板の埋材ごと彫更る六日の昔蒲十日の
 菊中長視采る所約る梓のの書肆が致す兼引等閑中竟果
 二頁小過あるを校合の屈ぬといふと思ふ人もあはれと序目の巻々稿ト
 果てて後綴りぬれ刊刻も隨て最太う後れと本文摺刷の折る急迫く校
 閱去ぬるも熟讀重訂の暇るれば二三頁の物といふも檢送さるとは且出像
 るごに至りて蛇足の爲動もまじら作者の画稿と違ふもあれと改め画せん
 ゆくそ終りて閣くもより看官作者の苦思を知り稿本の訛謬をゆくと
 思ひぬ稀るべし人のへて書を校する風業と塵埃の中も異るるを隨

南總里見八犬傳第九輯中套總目錄

第七百四回

富山之餘波

謁老侯親兵衛訟神助

驚奇特刺客等各歸順

第七百五回

富山之餘波

名山有靈枯樹復花

逃客無路老俠獻俘

第七百六回

大山寺春宵

牽青海波景能自稻村來

犯黑闇夜曼讚信赴館山

第七百七回

館城之着落

大江親兵衛活捉素藤

里見御曹司優還陣營

第七百八回

館城之着落

義成旨仁寬刑

貞行謁王奏克

第七百九回

妖怪之卷

八百尼山居誘引敗將

濱路姫病牀被冤鬼壓



第十百十回

妖怪之卷

反間術妙椿遠大江

妖書孽仁辨別妙真

第一百十一回

館山後卷

妖尼庭聚眾兵

素藤夜襲舊城

第一百十二回

館山後卷

稟君命清澄伐再叛賊

旋機變素藤易牛狼囚

第一百十三回

妖怪後卷

三匠瓶醒里見侯

一級首懲南彌六

第一百十四回

釋疑之卷

義俠瘞元遺郭號

神靈懲魔全處女

第一百十五回

遭際之卷

前田岡大刀自救孝嗣

不忍池親兵衛釣河鯉

八犬傳第九輯中套目錄終中套下套各七卷共十四卷刊行





義顯於衰
世之國
孝出自忠
信之家
賴齋散

政木全成嗣



安西出來人
景次

荒磯南弥六
あつとく

風流の安房の
あつとくよみみ
志をみちぬらむ
りとをあくなり
玄同居士



夏あつもとえ
 此の麻のあは
 きわたらひ
 ちのりや
 ちまもむ
 狂齋

吾嬬前

里見御曹司



忠直無助
 錫慶祥
 天
 皇
 水痴叟

満呂復五郎

重時

天津九三四郎

夏明

田税戸知賀九郎
逸時



混濁荒川智計廣言行
不濁稱清澄 愚山人

荒川兵庫助
清澄

八代傳九郎卷二

六下

友桑宅哉

浦安牛助
友勝

登桐火早



おあはれ浦
秋のまゝなるるわれ渡
あはれそのまゝ月乃
うけ

雕窩老人

苦屋八郎

早

奥利狼之助
出高

深木磯九郎
喜原

八代傳九郎卷二

友桑宅哉

懿哉八犬之英士。起八方也。妙哉一顆之靈玉。護一身也。仁義禮智。救柔挫剛。忠信孝悌。補君討讎。抑離散。有時行會。有日八士不盡。簪者殆二十餘年。終同帰一州。而威名不朽。然當時載筆者。未具粵肇有演義書。是義笠翁所編述。筆端波瀾。與彼水滸三國演義。拮抗自是。書一出于世。而人人方知犬士所以為犬士。可謂奇且盛矣。余叨賦拙詩。以為證。詩曰。
 犬姓俊雄都八人。俱惟里見股肱臣。乾坤到處曾無敵。蹕蹕叢翁紳史陳。

琴籟閑人題



南總里見八犬傳第九輯卷之七

東都 曲亭主人編次

第四百回

老侯小謁 親兵衛神助と訟ふ
 奇特小驚鳥 刺客等各歸順也

再說那樞杵見們の手の槍と因り義實主と合つ綱を敲き果て聞く
 折り思ひ入る死の樹間より只見る一個の大童男大江親兵衛仁と名告て呼び禁めり
 突然と走り出來る百魂足柄山小生育る又那酒田公時るる童話を思ふる
 桃太郎のあのと驚を呆る樞杵見們の勢に忽地胆落て他れを心磨とる小
 憶ひを俱に女女と後巡し七左右を有敷系を敲きも蒐りぬる然と續く敵を追て
 思ひ回せ諸聲高く噫息を吐き小猴子奴が林を刈り牛を鞭り狗を走し兒を
 趕つる身不相応しかを命を知反似而非胆勇由多仇の助劍と息絶る折

後悔を快敷く付せと動搖せし身勢と馮心假猛者槍と拵て左右より咄と
嘯して三十一小競鬼を親兵衛の毫も噪ぐ身と反して素樸の棒を
拂ふ向ふ前を奮勇剛姚當るべしと楹松見毎に避易して皆竿槍を
打折れ刀抜く間も奈麻与民の腕前脛肩腰骨を撃ち惱まれて平張伏す
中へ一個の楹松見聊本事あるべしと連り槍をうち閃めしと刺んと找む
親兵衛のめくし受住て邪と聲をて丁と撃ち劇し棒の柄の中へ這も亦槍を
打折れ餘る棒小肩尖を撃たれて痛林走の堪ざりけし苦と一聲叫び果て
せ脚踏住めて樹の間潜りく逃走す親兵衛透き趕ふ方を知り
笑ひて迂捨て舊所からの來り撃つ楹松見四名の腰に準備の藤蔓の
威嚇々と縛縛せ備の松を繫住り而祖の袖を斂め裳を下し塵を拂ひ義實王の
身邊の多額衝死跪坐て稟せり鳥許かすの心も我姓名の豫より聞召し

このあや小可下總多市川の船長とゆり山林房分獨子と初名の真平も又大八も
喚れる大江親兵衛仁とて君は厄難我恩神の誨りて豫知ありあり聊
先途の違もあや見え見参入のまると是神慮の馮せり君臣一致の時到来寇の輒
く對治せられて身も恙す備えと飲りて七の辨説さふ鄙るも大人備りけ進
止の世も馮多くそふけの介程の義實王の思ひゆる楹松見の伴當三名を射てこれ
已に下をさ下をさ防戦んそ刀の柄も楹松見の伴當一名の少年大江
親兵衛仁と名告て樹の蔭より頭れも瞬の間五個の寇を撃ち伏せ迂走す武藝勇
敢人柄も思ふ優る挿れ且怒罵且討て自ら目成せし禍鬼も多し穰も
この少年の豫多く大八の一人大江親兵衛仁の名告ると既分明るめり疑雲の
霽れも伏し備る巨樹の株の尻より掛け眉根を擧げ左見右見て原東和郎と妙
真孫と号え大江氏那大八の親兵衛より伏生れり仁の字の玉を持ち甲斐のそ

親房八傳のやきん大士の隊尖のぬ死佳々の瘧子ありと云妙真并照文門の噂は豫
 听し神輿と云とて往方も知る事あり六稔以前の事なりと云四年の秋ある事
 然和郎の事今茲九才多と云思ひよ似き身長約莫三尺四寸あり筋骨さ
 へは逞く凡庸の少年の十六七歳ありと云及武藝勇力單身あり五個の寇ふ
 當りて物も甚四個と生拘一人と撃走せし和漢稀る神童と云ふれ加以年
 居人迹絶て浮世遠流深山は誰鞠親て人と成けん話一も故を云其摩を
 と問れて親共衛然然ん疑ひ理り既不知れまろり如く小可純は年四の秋采月の
 初旬ありあり船九郎と叫做たは舟人の舟稠せられ命危り折不測は神女の
 擁護ありて那船九郎と誅戮せられ這身の神女は擁護れて這山を領て置れり伏姫
 上の墳墓あり山崖と宿と云その日よりと姫上の神霊は夜と云る昏と云る養れまろり
 一と初と宛夢不似く思ひ辨るまろり舟人となりて成る隨折々神女の誨よりて

我うと知るの事ぞ大母妙真の那時候より君の御恩と稟まろりて恙もあらず今
 もわづ瀧田の御城内に在る夏之顛末外伯父大田小文吾悽順の上りたるの餘同因
 果の六犬士犬塚大川大山犬飼大阪大村の流浪窮死昨日佳々の事あり又筒
 様々々の事ありと云七犬士們が六稔以来の履歴並動靜その折々一事も漏れず神女の
 告をせりひと瞭然とて那人々の傷小立て看るごとく知る事と云ふと云然の之食四
 トの衣皆姫上の神通力にて那里より取寄せし佳養れまろり又只我身單ふ
 あらむ這年来同宿の人の帮助あり人迹絶る深山に在りても徒然と云ふ事あり身
 年毎長伸て既亦肉を食く我々怪しむ事最も大なる事あり日毎神女の賜り
 云仙將奇果の故の秋理として論下され神妻奇特と云ふ事然神女の御恩
 徳の故奉る小自達あり習讀書ら馬鞍の劍文学武藝何れと云皆教させぬ
 云六稔以降修煉せし本事る事ありと云これ神女の日暮我々と共侶の品出處

あ在さまが。要の折出頭。要折見えぬ。倭而今朝。姫神の又忽然
と立頭れて。小可們不宣。けは。左側。我父。絶ふ。西之個の伴當と領。我境
墓と見んと。み。山踏。這頭。來ぬ。折不測の寇。犯。見
と。親兵衛。の。時分と料。件の寇。對治。我大人の見参
入。これ。這餘の。箇様々。叮寧。宣示。這。個。短刀。這。錦繡の襦
衫。一領。小可。賜。又。宣。我。懐劍。我。生前。身。放。の。截。味。尤。覺
あれ。汝。身。の。護。せ。錦。繡。の。襦。衫。我。昨。宵。縫。た。め。か。汝。八
犬士。一人。我。大人。初。見。参。鹿。榜。の。衣。の。身。の。皮。下。子。鄙。備。う。
う。取。ま。抑。你。同。因。果。七。犬。士。の。黨。我。生。做。せ。子。小。異。宿。因
深。れ。孰。疎。思。然。然。他。們。窮。厄。每。影。立。形。添。て。救。う。と。死
め。你。特。薄。命。也。仙。折。二。親。と。喪。を。刺。必。死。の。大。厄。一。見。過。く。身。

その窮厄。救。這。里。領。て。五。六。稔。養。育。く。像。の。生。育。く。只。是。仙。の。身
單。悲。し。の。思。ま。中。親。房。八。安。房。の。俠。民。仙。木。撲。平。が。後。小。て。身。殺。と
仁。と。做。く。義。俠。を。よ。あ。と。そ。子。料。仁。字。の。靈。玉。得。て。八。犬。士。の。隊。小。合。さ
故。夫。仁。義。八。行。人。皆。天。上。の。尊。所。生。財。誰。も。か。五。常。八。行。の。心。を。ん。や
然。れ。世。の。庸。人。の。通。て。人。慾。の。私。迷。て。遂。は。八。行。を。執。喪。さ。る。の。稀。き。任。ま。六
世。の。億。萬。人。の。捷。れ。五。常。八。行。と。做。ゆ。ん。易。く。ね。就。中。仁。を。の。孔子。も。願。く。許
ま。了。の。素。是。天。と。の。德。と。考。く。故。之。け。自然。と。天。と。叫。做。人。在。り。て。仁。と。の
你。の。親。の。義。使。ゆ。一。字。と。の。一。字。と。の。名。と。仁。と。喚。ぶ。れ。我。の。徳。と。天
と。做。ゆ。ん。縦。至。仁。至。孝。も。婦。人。の。仁。の。做。る。今。より。勉。て。殺。生。の。好。ま。で
忠。恕。惻。隱。の。心。と。世。事。足。り。ん。世。武。夫。の。業。の。も。大。刀。と。帶。弓。箭。を。合。て。君。父。の。與。不
仇。と。防。身。と。も。護。る。の。あ。れ。當。前。の。敵。と。擊。て。降。を。殺。さ。走。る。と。捨。て。

人と征する徳どりてせば。則忠恕の美稱あり。仁との名あはさる。頃者我任
 る。冠者義通の躬にあり。久く寇の令を罷れて。今も館山の城内に在り。其の故の義
 成夫婦。及我大人の最大。胸安くまごのまま。大人の登山の美あり。你先這
 高峯る。寇と争對治して。更ふ又館山へ赴いて。那素藤を降して。我任義通を
 極く大人と義成夫婦の憂苦を慰めまわさる。六稔休の養育ある。我も回成
 起去。いふに。是まごの既。この世の縁盡され。今より永く別れる。奴が念を志
 る。くまご。勉め。勉め。と繰返して。論じて。自餘の者も云云と別れて。又忽
 然と降聚る雲。神駈れて。檜滅を似く亡ぬ。迹の香氣。顔都と異死降
 了。音樂。翠天の響え。峯上。白雲の風。のま。あ。ま。登時。小可哀
 慕。の。母。別。る。心地。と。外。視。思。を。蹠。踏。り。う。ち。泣。て。の。ひ。ひ。と。同。宿。の
 甲。乙。小。口。管。諫。慰。め。ら。れ。て。ま。な。く。我。の。回。る。の。う。ち。幾。の。時。も。と。ま。り。今。も。心。の。悲。を。

然とと本早のひが。憊々も。君の與。小寇。帝。神女の誨。恃。り。下
 と。思。心。の。の。そ。れ。て。前。より。這。頭。小。樹。駈。れ。て。御。登。山。と。待。ま。り。小。果。と。神。女。の。不。現。の
 違。む。君。の。寇。做。と。慄。心。見。ま。り。そ。四。個。と。生。拘。り。れ。も。鈍。一。個。と。漏。せ。折。る。不。追
 稠。捉。ま。る。よ。あ。か。ら。る。ぐ。も。あ。ま。り。一。走。の。捨。と。教。め。神。の。隨。意。好。捨。る。
 用意。は。是。の。ま。ま。那。奴。們。を。對。治。さ。る。始。より。一。又。よ。と。其。棒。を。總。て。數。
 什。と。搦。捕。り。ゆ。り。の。寇。を。怒。不。棄。し。て。殺。さ。と。そ。の。所。初。小。七。大。士。の
 小。可。が。所。在。と。年。來。尋。難。て。八。人。具。足。せ。折。る。と。參。り。と。固。辭。ま。う。一。今。も
 他。御。の。流。寓。る。そ。の。義。の。信。言。ゆ。が。志。と。信。と。神。女。の。告。を。あ。ふ。よ。り。事
 詳。は。知。る。の。う。ち。然。と。も。我。を。言。報。せ。ん。り。由。る。心。苦。く。ゆ。り。小。這。身。果。が。那
 人。々。の。先。と。今。見。參。入。り。も。不。思。議。の。計。會。併。入。力。人。智。の。よ。と。失。死。の。あ。わ
 ら。皆。是。神。女。の。神。謀。也。君。の。恙。ま。り。腐。ま。る。寇。の。大。槩。對。治。せ。ら。れ。我。身。の。顛

未送もき。少えわけの意外の故に何れも又これの優を任はれ程の御曹司を極
 攬まわさく。御覺念を尉めさるる。去の美も御心安らふべし。うちも任させぬやと
 稟ま詞の未き。過去未のりまふ前後文系を物とてひの宛水と流を似く辨論
 義あり。亦忠あり。現憑に勇士の嫩生是八犬士の隨一といひても多相親才学
 自然と備言家傑の心術言語頭れて思ひける。此の事と美我實主いつ
 づと。所々連の駭嘆して。肩所く隨不疑の胸うち豁け合はれる。事の妙
 大なる。腰を扇子と抜合て。颯と推啓に親兵衛をうちあはせ。宣を。通
 愛。後生る。言皆意表。和郎が顛末。奇る哉。伏姫の世
 稀る。女侠のそと思ひ。身後小神靈。悠々も灼然。功績。和漢
 儔。や。願。和郎が六槍の程。最大なる。現仙境。生。神將水
 奇果。旦夕。さ。だけ。故。ん。それ。あ。後。の。奇。入。和郎。要。小

帯。短刀の我認り。その伏姫が終焉。身を放き。命根を悍くも断
 東西。當日。姫の亡骸と傳。柩。斂。復。茲。看。る。不。思。議。と。恰。と。云。恰
 と云。因。の。縁。あり。證據。あり。身。那。瘧。も。あ。る。ん。信。れ。和。郎。が。よ。の。搗。鬼。さ
 ぬ。と。知。る。足。れ。り。今。何。ぞ。疑。ふ。餘。も。多。く。這。那。と。思。ひ。合。さ。る。や。あ。れ。も。急
 ぐ。と。る。べ。れ。そ。後。の。て。解。示。さ。る。定。不。姫。の。孝。順。も。這。八。犬。士。の。一。人。を。我。災
 厄。と。救。ひ。る。神。力。不。可。思。議。感。深。く。是。不。就。て。も。更。不。痛。思。の。兩。個。の。伴。當。銷
 船。員。六。小。水。門。目。の。寇。の。獵。箭。前。の。窮。所。を。射。さ。て。忽。地。命。を。殞。し。惜。む。べ。し。と。嘆
 息。し。う。悵。然。と。那。亡。骸。と。さ。る。の。み。親。兵。衛。尉。心。稟。ま。る。と。又。伴。當。們。が。受。入。矢
 傷。の。非。如。穴。窮。所。あ。る。と。毒。笠。前。ま。て。の。み。不。死。の。只。一。箭。也。呼。吸。絶。る。も。宣。定。以
 あり。遮。莫。小。可。幸。ひ。神。女。の。授。け。あ。る。回。生。起。死。の。神。藥。あ。る。必。其。の。效。觀。面。を。活。せ
 と。い。ふ。と。所。先。や。試。み。ん。と。い。ふ。と。身。を。起。て。矢。傷。兒。の。身。邊。小。立。り。兩。個。の

矢傷とよく見六郎が死に至るまで。為楚と握持する義實王の刀あり。その合放
 ち塵を拂ひて捧げ返す。義實王の受合を腰に挿副ひける。倭
 又親兵衛の腰に吊る薬籠より。那神薬を幾粒も遠く摘出して。啞碎せし。矢
 傷見們が身の中へ。箭を抜損て。這那共の瘡口へ。薬を塗着推容れて。開ける
 牙を推開せし。餘る薬を沃た入る。石湯を掬ふ療養する。その届たる進退精妙
 兩個と俱に披起して。背を三回巻提して。死せりと見え。見六目へ。神菜胃中へ下
 ると。軀を忽地蘇生し。眼を開け息を吐く。一霎時。愕然とる。氣力を奪。我
 復りて。痛楚もあらず。共侶より。驚かして。恙あり。主と見え。又親兵衛と生
 口の。應心見們を。今。今。我を怪む。相執ひて。慌しく。主君の身邊に。朝
 ひく。共侶も。稟まを。臣への。御前。寇の。獵前。射付され。と知る。其後の。覚
 えず。亦。這。一。少年。その。姓名。人の。噂。豫より。少。知る。那。八。大。士。の。隨。一。人。大。江。生。の

折もよく。君の先途。不達。ま。あ。せ。て。那。應。心。見。們。と。四。名。ま。ま。生。拘。り。事。の。趣。且。姫。神。の
 靈。驗。實。助。年。來。那。身。と。這。頭。並。具。て。人。と。成。り。と。和。漢。今。昔。未。曾。有。の。奇
 談。耳。入。り。心。通。し。て。一。事。も。漏。さ。ず。知。り。より。覺。て。の。今。も。記。憶。せ。り。倭。一。程。大
 か。ま。る。ぬ。大。江。生。の。介。抱。也。蘇。生。り。て。身。の。安。く。矢。傷。も。亦。愈。お。け。既。お。起。居。自
 由。と。い。ふ。勇。士。の。帮。助。伏。姫。神。の。神。力。お。て。お。ひ。け。お。か。る。大。奇。大。幸。最。も。惶。く。
 と。稟。ま。を。義。實。王。に。听。ひ。て。原。來。若。們。身。の。外。も。心。神。去。り。有。つ。る。を。少。知。り。ま
 秋。開。も。亦。奇。之。且。その。矢。傷。の。立。地。も。愈。一。の。逆。伏。姫。を。這。親。兵。衛。に。授。け。り。と。神。菜。の
 效。も。馮。光。り。曩。義。通。の。伴。當。們。が。多。く。矢。石。の。傷。ら。て。一。旦。命。終。り。一。稻。村。の。城。お。て
 還。され。て。甦。生。の。奇。特。あり。け。り。と。是。神。の。祐。お。て。併。親。兵。衛。の。介。抱。を。い。ふ。一。と。事
 よ。あ。あ。及。び。快。然。と。い。ふ。と。仰。目。見。六。も。俱。親。兵。衛。の。對。ひ。て。額。を。死。恩。と
 稱。へ。欽。び。を。舒。て。又。い。ふ。我。們。の。那。箭。也。共。命。の。終。る。と。惜。む。足。ら。ぬ。と。老。侯

恙きしゆさ千遍悔も及んぬ然も和殿の帮助に依りて君臣を異の幸福あり短は
 詞不盡かゝる洪因心そのれを親兵衛所あせ并首の口誼を益我身何
 等の功あらんや皆君侯の洪福也神女の真助顕然り御高直稟事の多くて生
 た這櫃忍見們が来歴を責問がり此意は館山の城内より素藤がかゝる刺客
 中であらんぞんといふ目と目六郎の然々々と點頭で拷問の事をも咱們兩個不任
 去のいひてとらひつゝ共侶自身を起して樹枝を折て鞭とら敷置れ檻忍見們を
 鞭撻責んと立せ鬼は檻忍見們の驚慌で跪せ諸聲揚てやゝ等の入々責
 られどもぞえおん既小推量せられどく我們的素藤と一味のめでいへも然と来
 歴を承あむ且鎮りて歩めらむと叫ぶ義實うち听ひてあぐん女を住めて
 徐不言と盡きやと仰目貝六と兼りぬと成り左右別れて跪坐り登時件の檻忍
 見們の頭立てる者とぞ一に兩個先陳きま在下の故の當國の一郡司安西三郎

大夫景連が再任を安西出来介景次と叫做まのめいといふと名告れ又一個が安西在
 下も亦昔年老侯は討滅され麻呂小五郎信時が同宗を麻呂復五郎重時と
 叫做まのめい然も景連信時の滅亡の比へも我が親の病死で自他孤兒にれれ由
 縁の人お堆方られて梢に上總走りて夷瀆の普善村に落住りて世に民間に不
 たり一も墓田権頭素藤が館山の城主より安房四郡の舊領主神餘麻
 呂安西の子孫を承りて稟出で扶持せんと尋るよのゆゑに我々兩個神餘の兒孫と共
 館山に赴きて来歴を演家譜と捧けて仕んを請ひて素藤終に對面して馳城
 内にお留め扶持せられる管待通て等酌るるに賓客の礼を以て月俸の餘は東西を
 長く宛せられ我々心も傾けていふと思義お報んと思ふ中も似せ素藤の慢酒色を荒
 らしむる民を虐は奢侵を極めて又我々をさへも禄を減一格を賤て奴僕の像に
 使ふといふと朽惜く思ふめり外より是の岸もまれば立ちも泊去りて在りけは
 程お素藤



十五



猛の逆謀あり。縁故の國主の息女。濱路姫と取んと欲り。宿望稱の。執念深ま
 ぶ。國主と恨み。去歲より伺ひ時と計策を旋りて。義通君と合謀。國主の
 勢を引受て。勝負を分る。是世人の知る所。今亦具ふ。及も任而
 素藤の。比我們を困室。招よ。其く。汝達龍田。赴て。義實を狙。果
 事。潰れ。義成。敷捕。入。日。易。然。房。總。二。國。我。堂。入。汝
 達。這。回。大。功。あ。る。安。房。四。郡。と。整。置。與。て。各。一。郡。の。領。主。を。做。さ。ん。甚。麻。呂。の。義。と。り
 見。や。と。亦。他。支。も。く。馮。れ。我。們。必。准。備。と。其。夜。城。内。と。潜。入。て。當。國。赴
 兄。も。同。志。の。甲。乙。絶。れ。五。名。本。月。の。初。旬。より。龍。田。の。城。下。と。徘徊。と。潜。入。て。欲。せ。り。う
 ども。城。郭。總。て。堅。固。と。便。宜。と。ぬ。り。老。侯。け。未。明。より。大。山。寺。へ。參。詣。の。風
 聲。城。下。と。時。と。断。然。と。像。の。准。備。と。迹。を。跟。け。去。向。を。料。り。て
 狙。撃。も。く。欲。せ。り。微。行。と。ま。せ。も。五。六。十。個。の。伴。當。あ。れ。左。右。を。下。り。奈

去。死。と。思。ひ。難。一。年。來。這。頭。の。山。河。の。水。炭。淵。を。做。去。り。人。迹。又。も。絶。り。の。あ。る
 日。猛。可。水。落。て。涉。ま。易。く。と。老。侯。恥。て。登。山。の。亡。息。女。伏。姫。の。墳。墓。を
 亦。ま。と。伴。の。蒼。隸。が。罵。り。と。洩。す。り。心。勇。と。間。道。と。走。り。先。を。快。這。高。峯。の
 涉。り。多。那。里。の。樹。林。に。埋。伏。し。悄。々。地。に。准。備。の。毒。箭。を。り。伴。當。二。名。と。射。て。仆。し。
 同。下。箭。局。の。老。侯。と。脱。し。せ。と。彎。固。の。二。張。の。弓。弦。の。忽。然。と。断。れ。て。役。多。達。と。那
 ぞ。此。最。も。怪。し。め。る。却。已。ば。あ。る。更。に。准。備。の。竿。槍。と。推。合。相。て。敷。ん
 と。折。候。あ。不。測。の。帮。助。と。我。們。四。名。の。生。拘。れ。一。個。を。酷。く。撃。つ。惱。ま。れ。辛。く。逃
 亡。れ。る。料。る。痛。楚。堪。む。と。遠。く。の。山。を。行。き。現。在。に。這。少。年。の。勇。力。武
 藝。の。億。萬。人。の。捷。れ。の。三。年。來。神。女。の。冥。助。と。任。務。深。山。の。人。と。成。り。て。花
 談。奇。話。の。側。面。を。身。の。非。と。悟。り。慚。愧。後。悔。世。に。是。流。季。子。及。ぶ。争。ひ。を。神。靈
 冥。福。併。老。侯。の。賢。明。仁。義。の。俊。德。と。今。昔。當。害。を。轉。く。這。祥。瑞。不。逢。ふ。り。あ

然るに昔年景連と信時の滅亡の賢を媚して邪計を行ひ非義の利を欲せり
 所以に老侯の罪をばりし我理義を暗ければ只仇を思ひ怨を思ふ願ふ
 事を要せむ及て奸賊素藤の扶持を求めその隊を屬て他と與ふ老侯を刺せし
 討つ資けり周武と殺さる不似たり今邪念を轉じ濁を去て清附んと庶幾外
 侮るるれども身の罪輕くねい縦饒されかとも仁義の君の死を切もの
 るべし天神地祇も照監ある今所虚談あり願ふの亮木且あれかと那陳
 且は這も陳とて迭代の後悔の招了紛れりけり親兵衛をうち听て義實の直
 老侯聞召れ初他們が毒箭をりてお伴當と射付せし侯を犯さる前より
 甚き槍と引提てうち向ひをあるる思ひひは那折弓弦の断れり神女の擁護
 就てま不疑ふ安西麻呂の黨を候と死心よりあゆめ神餘の逆臣定包を
 逆より家亡びを我君義旗と揚めて定包と討めし素より是を徳とす

る小因心義と仇とて殺すませし其意をの義を質しひつやとを那餘の生
 口們的所の俱の聲を擧て大江生々々我由來歷來意と詳おせえあげ疑念
 解く憐愍と無のひと叫びるる一個の且の争う在下の神餘長袂光弘近習
 るりけ天津兵内明時が弟也天津九三四郎員明と叫做きり當年這地の狭
 底とゆえる那杣木樸平と洲崎五坊を謀り合を山下定包と殺さんとせし及
 那逆臣の奸計が陥られて光弘主を犯せ折我兄天津兵内の樸平五坊と戦
 命を其里の須より是より先お我姉の光弘主お仕へかどの那玉梓は儂あり既
 主君の遺を承て五ヶ月及び比光弘果敢る殺るる定包長袂と横領ある我
 姉の光弘主の遺を承りて知りて淫婦玉梓をあるる毒を頼んと欲する事
 幸いお洩せし在下姉と伴て悄悄地上總へ走り蘇々利村を親族許共
 侶お潜びる在り徳而月來ふる隨お我姉の産の氣つる生れり男兒故主の落

亂るるを以て左も右も多く鞠養む程に我姉の時疫を竟る黄泉の客と有りて折
 々山下定包に里見の義兵討滅され又麻呂と安西も滅亡する事の趣を世の
 風聲も傳くめり然りとて還るる家も有。是より安房と上總と八里見の有と有
 ちかど神餘の子孫を尋求めて絶る家も嗣せんと宣ひ告ると沙汰も傳へし恨
 く思ひの訴出んはまご多。百折千磨の世と渡り。腋子と養ひまわせし腋子
 質弱多病と且その性も人並らねば年十五六及びても甘叔と承てふ分ちる判風
 濕小嬰り脚癩て年中二百六十日枕の外に友も多。筆把るるりの氣力もあらず
 と朽惜く思へども鍼灸茶餌加持呪法も空憑ぬめて效驗る生來る争何
 せん浮世を潜ぶ身があれ神餘の姓氏を憚りて酒腋子の姓名と上甘理墨之弘
 世と名つけまわらせ。果敢く時に至ると俟し小料ら甚田素藤の招承応と
 這年來主僕二名館山の城内に扶持せられて安西麻呂們と同列するも亦素

藤心傲りて我をよとせむ。弘世への性態も刺病者なれば月俸も年
 年の賤し定の工もせられ口と餉も不足るも在下との苛刻く使るる日毎も
 かり。されども這回の密議を宣べて這個の人々三四名と俱し今日老侯と敷きせし
 神餘の後をあらせし恨し思ひてさう不変成る神餘の舊領長坂平郡と
 與んといれ心迷ひて賢明徳義の良將を暴虐奸詐の甚田が與し担敷き
 欲り。先非と悟りて罪と知る後悔も麻呂安西との合意も同意も。非如我身の
 この終結と顛と敷も弘世主と憐愍で小祿とも宛られ神餘の祀を嗣る
 去の年来在下が妻母孤忠も虚しく死して榮ある一世の然り快く目を閉じ願
 ひまらふ。その又の又の男子の同志の狭客荒磯南弥六と乾子と椿村の隆八と叫
 做す。のいでいとの八又隊八も跪き陳さる。小可い甚田殿小亭る恩もいひ素
 より國主老侯と怨むるも。但我乾父南弥六と昔年杉木樸平と俱し定

包と敷きまく欲りして。愆て光弘主と犯し。當目敷られる。洲崎を垢と外孫外
祖を垢と敷かれ折る不総角であり。上總の夷瀧を逃去て年来と歴より
と听た徳而件の南弥六を外祖小劣らぬ。使と氣あり。垢垢三が愆て光弘主と犯す。せ
最酷ら羞思ひ。神餘の氏族の在る。一臂の力盡く。外祖の汚名を
雪んと思ひ。日もある。所以小敷。劍白打相撲の術まで。その師小就て習治り。脅
力も人小捷れ。里の使長と衆人小首敬せらる。ののそ。父愆り。程小光弘主の
後胤あり。と。少知り。より。歎びて。遂に天津氏九西郎と父と結び。年来疎ら
糸。今番の計議。不荷擔。と。容。小可。と。伴ひて。三個の人々と共。侶小候。敷。まく
欲せらる。とも。這少年の勇敢。武藝。不敵。ま。ぐ。も。あ。れ。い。辛。く。命。を。免。さ。り。他
救。漏。ぎ。り。て。囚。れ。這。里。小。在。る。ら。俱。小。奇。特。と。感。悟。し。て。み。づ。ろ。新。小。志。べ。り。と。
逃。亡。さ。る。幸。ひ。る。も。他。が。不。幸。小。ひ。ひ。と。送。り。招。了。さ。り。け。義。實。の。衆。口。衆。意。の。

齊一かり。と。う。ち。听。ぬ。て。嗟。嘆。小。堪。ま。生。口。們。を。つ。ら。く。と。え。ら。り。て。や。れ。天津。員。明。と。名
ら。ん。神。力。魂。異。小。敬。馬。に。後。悔。陳。謝。の。遅。く。ま。ぬ。汝。亡。君。長。挾。小。光。弘。小。後。胤。あ
ら。び。何。と。も。早。く。愆。と。瀧。田。へ。告。訴。せ。ざ。り。けん。弘。世。と。わ。ら。が。ら。い。も。義。實。が。知。る。の。ミ
る。ま。當。時。金。碗。八。郎。き。その。子。の。み。と。知。ら。ね。ば。そ。何。と。も。い。て。身。故。り。ま。を。義
實。が。執。ち。ま。と。恨。ま。る。の。愚。痴。知。れ。も。その。孤。忠。の。憐。む。べ。又。景。次。重。時。と。わ。ら。い。も
ま。つ。り。當。時。麻。呂。安。西。と。義。實。が。討。り。小。あ。く。ま。信。時。の。景。連。小。賣。ら。れて。終。小
自。滅。と。取。り。あ。り。又。景。連。の。義。實。が。功。と。媚。ま。て。邪。計。と。旋。ら。攻。滅。さ。ん。と。せ。れ。り。故。小
已。と。と。の。老。鋒。を。交。へ。て。克。工。を。治。さ。ん。愆。れ。他。們。が。滅。亡。の。則。自。業。自。得。ゆ。て。愆。る。所
る。ま。べ。然。れ。れ。も。麻。呂。安。西。の。同。宗。さ。る。の。罪。と。謝。り。て。軍。門。小。降。参。せ。ば。我。當。執
念。深。出。崇。ら。ん。時。宜。小。より。て。舊。家。の。後。と。ま。て。家。臣。小。做。さ。る。小。遠。く。走。り。深。く
躲。れ。り。及。て。悪。人。素。藤。小。扶。持。せ。れ。り。是。由。亦。人。を。知。る。惑。ひ。え。の。餘。南。弥。六

隊八門の素是市井の使者なく志氣ありと云ふも、吾明の酔の同トカベト。そ左
まれ右もあれ絶つるに継ぎ廢れらるゝ肉まのの古昔聖王の道不して閉固れま
善政之陳さるゝの違ふ安房殿義成。小命乞へく願ひのぞく做も治せん但
その言の證據を異日る不より鞫問を賞罰の折あらん先々の意を
かゝと仰小大家額を衝て然る面不頭れけり姑して天津九之四郎貞明と大江親
兵衛うち對して目今隊八が稟去一と云。那荒磯南弥六と市井の使者でいへ
ども罪を饒して用ひのり必做をさるゝ之他一旦の逃れぬも敷され苦痛堪
びて山路を遠く走りか居不其頭不躲れ在るは汝是も亦知るべし。尚逃果
て。館山へ還らば虚実を草甲知くまき妙なるる後ゆいん人遣して往
方と涉獵しあふま。との親兵衛領にて我も亦如右思ふとのを目と貞六郎と
共侶うち所く。あふふ我門二個一個を許を蒙りて。涉獵て在る牽りて

来てんと憚ると親兵衛推禁め。不知案内身和殿們より我走一走りて
索んいでるといふも身と起えんとせ程の傍の樹蔭に又人ありて。やよ和子一霎時
等也其南弥六と搦捕て先の程より這里に在り。やよもあつと叫禁め。樹
間を徐歩するあり。此の是甚麻多者ぞ。開へ又這下の回解分ると聴ねり。
名山靈有り枯樹復花さく
第百五回 逃客路无一老俠傳と献る
登時樹陰に人ありて大江親兵衛と喚禁め。徐歩して來りけるは大家誰と云ち
見れば則一個の老翁。髮鬚の皓く枯野に残る小草の上を置く。朝露相異
る。身軀の瘦て枝疎る。漁村の松に似れども筋骨の衰を龜齡鶴算幾
ぞ。尚鑠鏢と輕健る。氣力面不見れて花田の布の綿腸衣の裳と叩く。袴と白
布の袖脚衣と。あふ朴刀を携る。那南弥六を緊く細く牽立ちて。杖を後

方へ續つくひの一個いの老媪うもを鹿榜あの衣さを被きて下短す小壺ま折がりつ膝かはり打う粉こ殊じ小精せ
 悍いまくのひ眉ま尖さ刀とを挾くまりが義實ぎを相あてて遠とくの眉ま尖さ刀とを檢く遣し捨すて裳とを
 解と下かち阿容あを俱おを杖きを却説く老翁らの南な弥み六ろを索會あ縮ちて義實ぎ主しの目め前ま
 遙との牽き坐まて膝折か俯ふるを後あ方はの老媪らも跪坐まて共侶りの先さ老ら侯こうと拜けり小こ
 程は義實ぎ王わうの這こ老ら男なん女にょが為体たいと料難が々々訝いふの備びをなするを親兵衛へい他た
 們は原はら是こ甚し麻まる者を和郎わと親考あ相あ識しりと他たも亦這こ山やまの年とし來き住すむ熟する
 兄あ衛ゑ和わ郎らうが同宿しゆくの者ものもあれば徒た然ぜんといふのも也具ぐるを支し向むけるも思ひま
 他た支しふ紛れて果はりし其その人ひと多おく怪しふもまといふ老翁らうと信とえぬひて老翁らう
 人ひと親せ兵衛へいと山居い同どう宿しゆくの者ものも近く找て顛末まと詳ふはえあはれる快と扇をと
 連れぬ招ぬ老翁らうの阿あと心と先南なん弥み六ろ員いん六りく目もくの牽き連れと主身しん邊へん
 找たぬ老媪らうも後小こ跟いてまる近く程員いん六りく目もくの南なん弥み六ろ又また樹じゆ下かの敷しき糸いと置おて親兵へい

衛ゑと共侶りの主しゆ君きみと左右さの守しゆ護ごを當下たう老らう翁らうの恭こうと義實ぎ主しの朝あと多と
 ちち拍は額がくと衝頭づつと拾て宣まさる今傍はら瀬せ逢あひ素より賤し我們われが貴人きの
 近ちか着つまると親くのもまる元と弥勒りやくの世よも有からんを惶おそれけれも稟りん上じやう言げん長ぢやう
 くの聞き召めれば數かずを取身みの死しと又世よの見みる小可この山やま道ぢやう節せつ忠ちゆう與よ父ふをける大山たい道ぢやう
 策さくが昔僕ぼくを初の姓せい名なの姥おば雪ゆき與よ四し郎らう後ご小せう梶かぢ原はらの神平へいと喚れの
 老らう翁らう又また此こ侍しやくを拙荆しやうを名と音音おんと喚做せうる道節せつの母母ははも及せぬ見み
 今いまより六稔しん前まへの秋あき采さい月げつの初はつ旬しゆん我わが兄あに十じゆ條ぢやう力りき三さん郎らう及お弟てい尺ぢやく八はち郎らうの武ぶ藏ざう豊ゆづ嶋じまの戸と田でん
 河か老らう大たい士しを追隊たいの大敵ていと遮留しやうの所戰せんて竟戦せん没ぼつ仕しの折折せつと音音おんの兩個らうの
 媳よめ婦ふ也やを單節せつと世と不娯ごて上毛もう洲しゆ甘かん羅ら郡ぐん白はく井けいの城ぢやう小せう程ぢやう遠えんく荒荒わう山さんの隱いん
 宅たく小せう在ざいる采月げつ六りく日にちの兩個らうの見子こ力りき二に尺ぢやく八はち分ぶん亡わう魂こんの母ははの宿しゆく所しよへ歸り來ぬ怪
 談だんの外も要緊けんのゆをまれば其その頭あたまの言げん略りやくゆん然ぜん而して言げん訥だつと後方あともをえ



親女衛

かたしあふたう
 世のつれづれ
 そとあひかれ本
 花さるよけり

八傳九車巻七

苗

文楽堂藏



花の志

花咲の公羽

八傳九車巻七

文楽堂藏



花咲のあはれ



花咲のあはれ

あま六

山路迷ふ
 南弥六
 生拘り

様の危難あらんとて大江親兵衛が對治さるといふ易なり。若し折を以て老侯が見
 参して俱に御恩預りまれば今より浮世も身元道節自餘の武士們も再會必
 遠く歩く陽世幽真隔れば是より永く別れん。の毛も送る借へよと神女仰かせ
 といはれて音音鬼を單節も皆共侶のうぢ馬にて遠く線香の煙を身と淨ゆ。
 那里に在るとい知れぬも輝見力二尺八も誨て大家共侶の併るを別れの惜る隨
 感涙の坐を杖の袖濡れて見方もさけい折る花降り音樂ゆえて尊さ越来弥増
 せし然る而もあはれあはれ一霎時目送りなり。大江生ハ時分と料も今日先侯の
 做さぬを對治せんを精悍多身装束の棒杖も麓路投て出てあはれ有敷
 心のまて推續んとて準備とまねれ音音并の媳婦孫們共侶として後小跟
 くと禁めもあはれ末の折迷ひけん一個の檻囚足も曳々前面より來る撞見
 きたりければ遣の過さ組伏せ。索と掛ひは他身不受る撲傷の疼痛や堪

かりけ小可如老人の敵しゆを及ぶ。憊而這檻囚見と牽く。這方へ来る程小
 同類の檻囚見四名のや大江生が捕れを招くと聞召を折るれ功を杖を
 言の果ると等しく逃る賊徒南弥六を趕捉んとて人々の既立せされけり。已
 び聲をかけた君の見参入るる。小可音音們兩個の媳婦六稔以前再生幸
 ひ伏姫神の眞助より稟上り二期の終に附驥の功過世あり一家の栄と直ま
 鳥許のこの檻囚見の墜八とを招了ま著れる那南弥六疑ひ。皆是君の
 威徳也。世の有るやいと直ま音音も千歳の壽を唱ける。目を听ゆ里見王後生
 口毎に至るまで皆駭然と面を注して新奇と感嘆する。その中義實其の扇子を
 膝に歌杖を推立頭を傾けてはくと听果て感心尤法を。姥雪夫婦も對して現不
 可思議の神助靈驗方才面前視聽さあ。誰う実説と思ふ。御向の既
 びませ。言はれよ。果は。新兵衛も听ね。我の年来伏姫が菩提の與他

月ゆめちどの亡日あきげよひ毎ま精せい白米はくまい五苞ごほう并なら味あじ噌そう將しょう酉油うすあぶら菜さい蔬そ柴薪さいしんの料りょうを大山寺おんやまのてら遣やてつてい食く良ら

 乞こ見み亦また厨くをと與よへと夏なつ冬ふゆのよ摩ま訶はのの施せ約やく小こ牽けんせせ小こ詣よ来きてま齋さいをますまるるのの寡くわ寡くわ折せ

 米こめのの餘あまのの東あづま西にしのの残のこらるとと誰たれががりりてて去いらるとと知しらぬもも信しんじるのの折せ々々ありあり又また布ぬいをを

 由よし如ごと右みぎとと傳つたへるもも久ひさくくるるぬぬ又また親おや兵へい衛ゑがが被かるる繡しゅう衫しんもも願ねがふふ出で処ところありあり似に似にるる昔むかし年とし伏ふ

 姫ひめがが常とこ布ぬい用もちひひるる錦にしん綉しゅうのの裊なほ見みありありけけとと他ほかがが身み故こりりななりり比ひ比ひ大山寺おんやまのてら遣やてつてい調てう度ど

 るるとと共とも侶りよ小こ那な里りのの宝たから藏くら小こ弁べんゆゆ置おけけがが彼かれとと此こゝとと相あ似ひららるるとと思おもふふ六む稔しん以も来らい

 伏ふ姫ひめがが亡な魂たまのの親おや兵へい衛ゑとと若わ們らとと養やしひひ外ほかのの東あづま西にしをを比ひ皆みな我われ施せ約やくのの有ありり餘ありりとと同おな

 ぢぢとと知しるるのの信しんじるがが由よしてて来きるるととあありり不ふ思し議ぎやや不ふ審しん義ぎののああららむむ然しかもも思おもふふとと

 宣のたまひひてて大おほ家や呼よびびととむむららふふののゆゆゝゝ感かん嘆たんああららむむけけるる這こゝろ回まりりもも盡つくささむむののもも楮ち數ずありり定さだ

 限かああれればば卷まきをを更かへへ第だい百ひゃく六む回かい解とけけ分わるるをを聽き絲いとかか。

南總里見八犬傳第九輯卷之七終

十編七巻之内七

秋野
 勝石院

